

「自分らしく」

茨城県 土浦市立土浦第一中学校 9年
大久保 果穂（おおくぼ かのん）

初めて会ったその人の、第一印象は「かっこいい」だった。その人は私の叔父と、小学校からの友達だ。東京で板前として働き、地元に帰ってきた時には、中学時代から仲の良い五人で集まり、バッティングセンターへ行ったり、ダーツをしたりするらしい。ツンツンとした短髪と、よく日焼けした肌は、その人にとても似合っていた。その人の渾名は、名字からとって「うっちー」名前は「えり」という。

修学旅行が近いと話した私に、うっちーは自分の話をたくさん聞かせてくれた。小学生の時に毎日背負っていたランドセルは、なぜ赤なのか。中学校入学準備での制服採寸では、なぜセーラー服を着るのか。成長するにつれ、自分の中で女性として生きていることに違和感を感じるようになったそう。そんな時、叔父達に話しかけ、一緒に遊ぶようになる。小学生の時は、楽しそうだなと遠くから見ていたから、仲良くなれて嬉しかったと笑顔で話すうっちーと、それを聞いて笑っている叔父を、とてもうらやましく思った。

中学校へは体操服で通い、髪を短く切り、叔父達と過ごすうっちーを、好奇の目で見える人達は少なくなかったという。そんな中で迎える修学旅行。

「修学旅行へは制服で行きなさい。それが学校のルールです。」
みんなで何度もジャージでの参加をお願いしたそうだが、聞き入れてもらえなかったそう。

「自分のせいで、みんなにも迷惑がかかってしまう。」
そう言ってうっちーは学校を休んでしまう。叔父達は放課後、毎日うっちーの家へ行き、一緒に修学旅行に行こうと声をかけ続け、学校では先生方と話し合いをした。うっちーは、自分のために動いてくれる友達の姿を見て、その話し合いに参加するようになる。何度も何度も自分達の思いを伝え続けた結果、うっちーは、卒業した友人の兄から学ランを借りることになった。後日、叔父から見せてもらった卒業アルバムには、ブカブカの学ランを着て叔父達と写る、うっちーの姿があった。

自分は性同一性障害だと、うっちーが言った。性同一性障害とは、身体的な性と自身で認識する性が一致しない状態のことだ。うっちーは、この修学旅行の一件が、自分らしく生きていこうと思えるきっかけになったと言っていた。自分には、自分自身を理解してくれる人達がいるからと。だが、それから環境が変わるたび、差別されることがあったそうだ。

たとえば、この作文の初めの部分を読み、私が「かっこいい」と思った「その人」を、男性だと思っただろうか。女性だと思っただろうか。私達は、きっと無意識に「男だからこうあるべき」「女だからこうあるべき」と決めつけているのかもしれない。私の学校では今、男女の区別が設けられ選択の余地のない現在の制服を、様々な文化や多様性へ配慮した制服に改めるための検討が行われている。一人でも多くの人が「男らしく」「女らしく」に捉らわれず「自分らしく」生きていけたらいいと思う。

このように、私の周りでも多様な性を生きる性的少数者に対する社会の理解は深まってきている。しかし差別意識を完全になくすことは、かなり難しいと思う。嫌悪感を抱く人もいるかもしれない。そういう人は認めなくてもいい。ただ、その嫌悪感を口に出したり、差別、いじめなどの形にあらわさないで欲しいと思う。言葉は凶器にもなる。目に見えない心の傷が、一生残るかもしれないことを忘れてはならない。

私達は今、多様な世界を生きている。時代は変化している。だからこそ、今までの普通や当たり前といった自分の中の考えを捨て、新たな視点で世の中をみることができる柔軟な姿勢でいることが必要なのではないだろうか。性別や見た目で判断するのはやめよう。どんな個性を持っていても、たった一人しかいないその人は、かけがえのない一人なのだから。

帰り際、肩をポンとたたかれた。

「受験が終わったら、店に食べに来てよ。ご馳走するからさ。」

そう言って笑ったうっちーは、やっぱり「かっこいい」。